

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05588・19K20797

研究課題名（和文）戦後ドイツ文学と詩学：言説制度としての詩学講義および詩論的テキストの文芸的契機

研究課題名（英文）Postwar German literature and poetics.

研究代表者

金 志成（KIM, Jisung）

早稲田大学・文学学術院・講師（任期付）

研究者番号：30822952

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：U. ヨーンゾン、Th. ベルンハルト、P. ハントケらに関する研究成果を出した。ヨーンゾンについては、共著書『固有名の詩学』（法政大学出版局）を出版した。ベルンハルトについては、第一長編『凍』の邦訳についての書評（図書新聞）、日本独文学会に於けるシンポジウムでの発表、および『オーストリア文学』への論文投稿などの成果を出した。ハントケについては、2019年のノーベル文学賞受賞を受け、彼の文学的営為を専門家の立場から紹介する文章を『図書新聞』および『ラテルネ』誌に投稿した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後ドイツ文学を代表する作家でありながら日本では研究の蓄積の少ないヨーンゾンについて、市販される書籍という形で論考を発表できたことは、当該作家研究における大きな学術的意義を持つ。ベルンハルトについては、近年ようやく注目の集まり始めた初期中編作品について日本語での初の本格的な論文を発表したことに学術的な意義が見出され、また、新聞への書評寄稿は一般読者に批評的な紹介を行うという社会的意義を有する。

ハントケについては、研究年度の間にノーベル文学賞という大きな影響力を持つ賞を受けたこともあり、専門家として積極的に紹介・解説をするという社会的意義を担った。

研究成果の概要（英文）：I have published research results on U. Johnson, Th. Bernhard, P. Handke and others. For Johnson, I published my co-authored book, Poetics of Proper Names (Hosei University Press).

Regarding Bernhard, I produced results such as a book review of the Japanese translation of his novel "Frost" (図書新聞), a presentation at a symposium at the Japanese Society of German Literature, and a paper submission to "Austrian Literature".

Regarding Handke, after receiving the 2019 Nobel Prize in Literature, I posted texts introducing his literary works from an expert's point of view in the "図書新聞" and the "Laterne" magazine.

研究分野：戦後ドイツ文学、現代ドイツ文学

キーワード：戦後ドイツ文学 詩学 現代ドイツ文学

1. 研究開始当初の背景

アリストテレスに由来する「詩学」という概念は、ドイツ語圏においてはバロックから啓蒙時代にかけて体系化を極めたものの、ロマン主義による「普遍的ポエジー」の発想によって解体されることとなった。ところが20世紀後半に入ると、フランクフルト大学が文芸出版社と協同して「フランクフルト詩学講義」と称するイベントを創設したことによって、「詩学」という言葉自体は文化制度的な枠組みで復権を果たすことになる。しかし同イベントは、学期ごとに作家をひとり「講師」として招待し、主に自身の作品を対象に創作の動機やプロセスなどについて「講義」を行わせる趣旨であるために、「詩学」は「規範的な体系」という本来の意味を失い、個別の作家名と結びついた「特殊な美学」を意味することとなった(S. Arendt 2012)。ただし、こうした「詩学」の個別化を通じて作家はいわば無条件的に詩作を行えるようになったわけではなく、むしろ各々に固有の「書くことの根拠」を探求・言明せざるをえなくなり、とりわけ戦後ドイツにおいては「アウシュヴィッツ」(グラス)や「東西ドイツ」(ヨーンゾン)といった歴史的・政治的な現実との対決が大きな役割を担っていると見なされてきた。また、こうした言説制度の範疇に、批評家が主催する文壇や各文学賞の受賞講演なども加えるならば、戦後ドイツ語圏の主要な作家は、地域やジャンルの違いを越えて、ほとんど例外なくこれらの制度的な枠組みの内部で活動したと言うことができ、なおかつ詩学講義や受賞講演といった詩論的なテキストが、個別の作家においてはむしろのこと、戦後ドイツ文学史全体において重要な位置を占めていることは、すでに当該分野の共通理解となっている。

S. Arendt による最新の基準的文献(2012)によれば、「詩学」という概念は「規範的な詩学」および「暗示的な詩学」の二つに区分される。「規範的な詩学」とは「詩の諸規則を明確に規格化する体系」と定義されるように、普遍性を志向する文字通りの「規範」であり、アリストテレスから18世紀のゴットシェートに至るまでの古典的な意味での「詩学」を指す。他方で「暗示的な詩学」は、特定の作家の文学テキストに観察される「特殊な美学」を意味し、その典型として1959年に始まった「フランクフルト詩学講義」が挙げられる。ここで興味深いことは、今日の意味での「詩学」がきわめて戦後ドイツ的な言語ゲームに属するという指摘である。つまり、「詩学」をキーワードに戦後ドイツ文学史を読み解くことは、同時に「詩学」という概念そのものを再検討するきっかけとなりうるというのが、着想に至った経緯である。加えて、戦後ドイツ文学の代表的作家であるグラスが2015年に死去し、バツハマンやヨーンゾンといった主要作家の歴史批判版全集の刊行が始まるなど、戦後ドイツ文学がひとつの歴史として今まさに再検討される時期に来ていることも、研究を開始する動機となっている。

他方で本研究は、以上のような学術的背景に鑑みた上で、「詩学講義」や受賞講演といった言説制度そのものとの対決こそが、各作家の詩論的言明を条件づけていたのではないかという仮説を立て、なおかつ「詩学」をめぐるこうした再帰的な状況を ポスト詩学 の状況と独自に分節化する。また、本研究課題の核心をなす学術的な「問い」としてさらに、実作者による詩論的言明は、作品解釈のためのメタ言説としてではなく、それ自体がひとつの文芸的実践として読まれるべきではないか、というものがある。

2. 研究の目的

戦後ドイツという個別的な時代区分の文学を「詩学」の観点から読み解き、それをつうじて「詩学」という概念を批判的に検討することが、本研究の目的である。その学術的独自性としては第一に、「戦後ドイツ文学」という対象の捉え方にある。当該分野の最新の成果としては、例えば W. Barner 編纂の『1945年から現代までのドイツ文学史』(2006)があるが、同書は終戦直後の「廃墟文学」から89年の「壁崩壊」までを基本的な枠組みに、作家名を単位にして時系列順に記す限りにおいて、従来の戦後ドイツ文学史記述の範疇に収まっている。他方で本研究は、外的な現実との対応関係ではなく、「フランクフルト詩学講義」が開始した)50年代末から(ハントケなどの新しい世代の登場を経て「戦後ドイツ文学」の枠組み自体が問われることとなった)80年前後までという、言説制度上の転換点によって扱う時代区分を区切り、なおかつ個別の作家名や直線的な発展史観に還元せず、詩論的な諸問題という独自の区分基準を設けることによって、戦後ドイツ文学の総体を新たな観点から描き出すことに、方法論上の独自性があった。具体的には、例えば「47年グループ」など

を媒介にした作家同士の交流など実証主義的な側面を参照しつつも、ドイツ内外の文学理論や思想・哲学の言説を積極的に応用した思弁的な記述をより重視した。さらには、戦後ドイツ文学という限定された対象を扱いながらも、言語芸術としての文学一般に対する反省のなかで「詩学」の問題を検討する点、そしてポスト構造主義という当該分野においては顧みられることのなかった観点を導入する点に、本研究の独創性があった。

3. 研究の方法

主に、以下の三つの方法ないしテーマ的関心から研究を行なった。「詩学」の制度化および制度化に対する作家たちの抵抗：申請者の分析では、50年代半ばまでのドイツ作家は、依然として「規範的な詩学」に定位する傾向にあった。具体的には、ベン『抒情詩の諸問題』（1951）やデュレンマット『演劇の諸問題』（1954）などは、それぞれ「抒情詩」や「演劇」といった大きな範疇のために一般的なプログラムの提出を目論むものであったと言える。他方で、フランクフルト大学およびフィッシャー社（現在はズーアカンプ社）といった教育機関や出版社が枠組みを作った「フランクフルト詩学講義」が1959年に始まると、バツハマンが「講師」を務めた第一回からしてすでに、「規範的な詩学」への抵抗が顕著に現れ始める。本企画が学期ごとの恒例行事となるにつれて、作家の側からの抵抗はさらに意識的なものとなっていき、ヨーンゾン（1979）やヴォルフ（1982）に至っては、ともに開口一番に「詩学」という概念そのものを否定することになる。以上の観察によって導き出されるのは、戦後ドイツにおいては「詩学」の制度化と制度内での解体が同時に進んでいったという仮説であり、この仮説が他の諸作家の詩論的テキストの分析をつうじて検証された。 戦後ドイツ文学の詩学における否定性：方法論としては、作家たちが「詩学」を否定する際に用いる修辞や話法の分析を行う。例えばヨーンゾンやヴォルフによる否定的な言明を「作者の意図」として受けとる限りは、彼らには「詩学」が存在しないというコンスタティブな結論にもなるが（F. Cambi 1989）、「文芸的实践としての詩学」という観点に経てば、その否定的な修辞ないし話法自体がひとつのパフォーマンスとして分析の対象となる。

さらなる具体的な着眼点となるのは、戦後ドイツ文学の詩学における 言語的分節化の境界／限界の問題である。これはヨーンゾンやバツハマンを始めとする多くの戦後作家が対決した問題であるが、持ち出される文脈が異なることに留意する必要がある。例えば、ヨーンゾンにとって「境界」はあくまでも東西の「国境」という政治的な現実にかかわるものであったが、バツハマンはヴィトゲンシュタインらの言語哲学的なレフェランスを踏まえて用いている。しかしより重要であるのは、この問題を考察することは、戦後ドイツ文学の詩学だけでなく、「詩学」という一般的な概念そのものを批判的に考察する糸口になることであり、直接的には、詩作＝実践／詩学＝理論という二項対立の問題とかがわってくる。つまり、文学以外の芸術分野であれば、作り手自身による自作品をめぐる言説は、独立した芸術論としての正当性を主張しうるが、言語芸術である文学の場合は、理論的なテキストも同じく言語で編まれるため、両者は区別することが不可能であるばかりか、ときには関係が転倒することもありうる。理論と実践の境界が決定不可能となり、ときに前者が後者に取って代わる以上のような事態を、デリダの「代補」を始めとするポスト構造主義の言説を応用して考察した。

4. 研究成果

当該研究期間においては、書籍出版物2点、論文2点、書評・エッセイなど4点、口頭発表4点を、研究成果として発表した。また、複数の作家を横断的に扱う研究課題に即し、ウーヴェ・ヨーンゾン、トーマス・ベルンハルト、ペーター・ハントケ、トーマス・メレという4人の作家を対象に、それぞれ成果を発表した。以下、対象ごとに成果を要約する。

ウーヴェ・ヨーンゾンについては、「固有名」という視点からの研究成果として、共著書『固有名の詩学』（前田佳一編、法政大学出版局、2019年）を刊行した。また、「暦」という文化学的観点から、口頭発表「「さあ、この年を記述しなさい」：ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』における暦と契約（シンポジウム「さまざまな一年：近現代ドイツ文学における暦の詩学」、日本独文学会第72回春季研究発表会、早稲田大学、2018年5月27日）」を行った。さらにヨーンゾンについては海外発信も積極的に行い、ドイツでの国際学会において2度の査読付口頭発表、すなわち「Die Grenze zerlegt den Begriff. Uwe Johnsons Poetik vor

dem Mauerbau. (Systemwechsel, literarisch. Ost- und West-Deutschland um 1989 im internationalen Vergleich. ドイツ文学資料館、マールバッハ、2019年7月4日)」および「„Chauseebäume, die sich vor uns verbeugten mit weißen Schürzen um den Bauch“ Korrespondenz und Allegorie bei Uwe Johnson. (5. Internationaler Doktorandenworkshop der Uwe Johnson-Gesellschaft, ロストック大学、2019年6月21日)」を行った。これらの発表により、研究対象について多角的にアプローチを行っただけでなく、各専門領域の研究者から生産的なフィードバックを得た。

トーマス・ベルンハルトについては、「フラグメント」という観点から、口頭発表「zer... zer... トーマス・ベルンハルト『アムラス』のフラグメント性(シンポジウム「フラグメントの諸相：文化的実践としての」、日本独文学会第74回春季研究発表会、学習院大学、2019年6月9日)」を行い、その発表原稿を加筆・訂正したものを査読付論文「破壊のエクリチュール：トーマス・ベルンハルト『アムラス』のフラグメント性(『オーストリア文学』36号、2020年)」として発表した。

ペーター・ハントケについては、研究期間中にノーベル文学賞を受賞したことを受け、専門家の立場からの概説的かつ独自の観点からの論考を、『図書新聞』および同学社のPR誌『ラテルネ』に掲載した。

トーマス・メレについては、代表作『背後の世界』を翻訳し、河出書房新社より出版した。また、ゲーテ・インスティトゥートと共同で著者を日本に招き、ヨーロッパ文芸フェスティバルでの対談および早稲田大学でのワークショップを行った。その成果は、査読付論文「この公共圏の片隅に：トーマス・メレの『背後の世界』」として、『ドイツ文学』160号に掲載された。現代ドイツの文芸公共圏における「包摂」と「排除」のジレンマという観点からメレの文学を読み解く同論文は、「文芸制度」をテーマとする本研究課題にとって重要な成果となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金志成	4. 巻 160
2. 論文標題 この公共圏の片隅に：トーマス・メレの背後の世界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 141-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金志成
2. 発表標題 「さあ、この年を記述しなさい」：ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』における暦と契約
3. 学会等名 日本独文学会第72回春季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金志成
2. 発表標題 I hate being social, it's awesome. 『背後の世界』翻訳出版の付随状況
3. 学会等名 第72回ドイツ現代文学ゼミナール（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金志成
2. 発表標題 zer...zer... トーマス・ベルンハルト『アムラス』のフラグメント性
3. 学会等名 日本独文学会第74回春季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Jisung Kim
2. 発表標題 "Chauseebaume, die sich vor uns verbeugten mit weissen Schurzen um den Bauch" Korrespondenz und Allegorie bei Uwe Johnson
3. 学会等名 5. Internationaler Doktorandenworkshop der Uwe Johnson-Gesellschaft
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Jisung Kim
2. 発表標題 "Die Grenze zerlegt den Begriff." Uwe Johnsons Poetik vor dem Mauerbau
3. 学会等名 Systemwechsel, literarisch. Ost- und West- Deutschland um 1989 im internationalen Vergleich.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Jisung Kim
2. 発表標題 "Trotzdem kann es narrativ sein." Zum erzählerischen Gestus in Lutz Seilers Gedicht "sonntags dachte ich an Gott"
3. 学会等名 Transition: ein Paradigma der Weltlyrik im 21. Jahrhundert?
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金志成
2. 発表標題 クレメンス・ゼッツのストーリーテリング: 短編集『丸いものたちの慰め』について
3. 学会等名 クレメンス・ゼッツ: ポストヒューマニズムの文学
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 前田 佳一（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 316
3. 書名 固有名の詩学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----